読売新聞【令和6年】2024年9月3日（火）朝刊

ネット基盤で自由な社会を

LEADERS 経営者に聞く

さくらインターネット社長
田中 邦裕氏　46

ＩＴ企業のさくらインターネット（大阪市）は、1990年代のインターネット黎明（れいめい）期から、ネットのインフラ（基盤）ビジネスに力を注いできた。高専在学中に創業した田中邦裕社長に聞いた。

サーバー貸し出し 高専在学中に創業

＜舞鶴高専在学中にインターネットと出会い、人生が一変した＞

電子工作が大好きで、中学生の時、大阪・日本橋の電器店街に足を運んでは、抵抗器やコンデンサーなどの電子部品を山のように買って帰りました。同じ趣味を持つ友人と「一緒に高専へ行こうか」と話したのを機に、舞鶴高専の電子制御工学科に進学しました。電子部品のはんだ付けなど、趣味だったことを授業でやるのは楽しかったですね。

そこで出会ったのがコンピューターとネットワークです。コンピューターとコンピューターをつなぐネットワークが別のネットワークとつながっていく。このネットワークが世界中でつながっているという話を聞き、これはすごいことだなと思いました。

パソコンにＯＳ（基本ソフトウェア）などのソフトをインストールすれば、サーバーを立ち上げられると先生に教わりました。サーバーは写真や音楽などのコンテンツを、ネットワーク経由で提供するパソコンです。学内に自作のサーバーを置くと、友達みんなが活用してホームページを作るようになりました。

最初は学内の友達だけだったのですが、話を聞きつけた同人誌の漫画作家さんから同人誌の宣伝や作品を紹介したいからサーバーを貸してほしいと言われました。そこで、プロバイダーさんにサーバーを置かせてもらい、学外の人に有料で貸し始めたのが96年12月。当社の創業です。

ホームページの公開にあたり、インターネット上のアドレス（住所）にあたる「ドメイン名」を取らないといけないのですが、わかりやすくて日本らしいものということで「ｓａｋｕｒａ（サクラ）」で始まるドメイン名を取得しました。これが社名の由来です。

インターネットでの発信は、サーバーが土台となります。すべての土台を作るのですから、我々は「創造主」のようなもの。自分たちの手がけたサーバーで、お客様がどんどんコンテンツを発信することに喜びを感じました。

北海道にデータセンター 大当たり

＜98年の高専卒業時には売り上げが月間100万円を超えた。本格的に商売をしようと法人化し、ベンチャーキャピタル（起業投資会社）から出資を受けた＞

インターネットの素晴らしさは、匿名で発信できる自由さにあり、自分自身も「社員の服装や勤務時間は自由でいい」と考えていました。

ところが、ステークホルダー（利害関係者）から「会社の体をなさないといけない」といった声が出ました。思っていたのと違う「既存の価値観」を要求されることに窮屈さを感じ、自分が社長というのはつらいなということで社長を1回辞めました。

＜2005年に東証マザーズ上場を果たすが、わずか2年で債務超過に陥った＞

何回もトライして、うまくいかないこともあったので、ようやく自分でつくった会社が上場できたとすごくうれしかった。

反面、途中から上場が目的化してしまいました。今まで通りの経営を続ければよかったのに、上場後に手を出した動画配信などの新規事業が失敗、07年9月中間期末に債務超過に転落し、私が社長に復帰しました。

大手商社の双日から出資を受け入れたり、銀行と借入金の話を取りまとめたりして、08年2月に債務超過を解消しました。

＜祖業のサーバービジネスに軸足を置いたことで、再び成長軌道に乗った＞

サーバーなどの機器を置いた「データセンター」が東京と大阪にあったのですが、岐阜県などで新たな候補地を探しました。北海道へ見学に行ったところ、気候が冷涼でサーバー冷却の電気代を削減できるうえ、拡張の余地がありました。そこで、11年に「石狩データセンター」（石狩市）を開所しました。5棟を建設できる広さがあり、今は3棟が立っています。

売り上げは最初、それほど大きくありませんでした。当時のデータセンターは東京が中心で、一極集中を避けるため、大阪に分散させる動きが出ていた程度。本格的に利用されるようになったのは、ここ5年ぐらいでは。通信速度が速くなったことやクラウドの利用が進んだことが背景にあります。クラウドはインターネット経由でサーバーを利用するだけなので、データセンターがどこにあっても構いません。恐ろしいほど先見の明があったと思っています。

現在は高性能なＧＰＵ（画像処理半導体）を調達し、クラウドで利用してもらうサービスなどにも力を入れています。生成ＡＩ（人工知能）ブームで、ＧＰＵの需要は劇的に増えています。

政府クラウド参入「作り続ける国」に

＜国や自治体が利用する共通の情報システム基盤「政府クラウド」。提供事業者がアマゾン、グーグル、マイクロソフト、オラクルの米ＩＴ企業に限られる中、23年に日本企業として初めて選ばれた＞

ガバメントクラウドが始まると耳にして、本格的に取り組み始めたのは3年前からです。参入に向け多くの人材を採用しました。手を挙げたのは日本企業が参入しないと、国内でクラウドをつくれる人がどんどん減り、結果として「作れない国」「使うだけの国」になってしまうためです。

この国がクラウドをつくり続けられる国であってほしいという思いからです。

日本の経営者さんは業務のアウトソーシング（外部委託）を進め、設備や人材を抱えない「持たない経営」へどんどん移行しています。でも我々は、自分たちでソフトやシステムを開発できるのが強みです。自社でデータセンターを所有し、事業も正社員が手がけています。

例えば自動車の場合、車を輸入して売るだけなら、それほどもうかりません。自動車メーカーは鉄などの材料から、付加価値の高い最終商品を生み出しています。「持つ経営」は人件費などの固定費がかさむものの、売り上げが損益分岐点を超えた分は、まるまる利益になります。デジタル分野のインフラは、今後数十年にわたり需要が増え続けるとみています。

他社が手を出さないものでもつくるのが、我々のアイデンティティーです。インターネットは自由でフラット、オープンな価値観を社会にもたらしました。その価値観を実現できる会社であり、そうした社会を作っていきたいと考えています。

聞き手・高橋健太郎　写真・鈴木竜三

たなか・くにひろ　1978年大阪府生まれ。98年舞鶴工業高等専門学校卒。高専在学中の96年に創業した。2000年に副社長に退き、07年に社長兼最高経営責任者（ＣＥＯ）に就任した。08年６月から現職。一般社団法人ソフトウェア協会の会長も務める。

■Ｔシャツ姿で多様性重視　自由で多様性のある社風を重視し、会社ではもっぱらＴシャツ姿だ。100枚ぐらい所有している。服装に関する会社の規定はない。社長が無難にスーツを着用することで、社員みんながスーツを着るようになり、会社から多様性が失われるのを避けたいという。

NUMBERS
30周年

2026年12月に創業30周年を迎える。自身の社長退任と復帰、株式上場、債務超過への転落など波乱万丈の日々だった。1990年代後半のＩＴバブルの発生と、その後の崩壊も経験した。20周年の時はワークショップを開いて、社員全員で、会社のビジョンを「『やりたいこと』を『できる』に変える」に決めた。

＊注目の企業トップらに聞く「LEADERS（リーダーズ）」は第１、第３、第５火曜日に掲載します。

※読売新聞社許諾済み　(C)読売新聞社 無断転載・複製禁止